
君の好きなところ

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の好きなところ

【コード】

N9908V

【作者名】

蓮

【あらすじ】

西英。いつか本家が出た筋肉云々のネタ。西の筋肉はなかなかだと聞いていてもたってもいられなくなって・・・ pixivやブログで同じものをアップしています。

(前書き)

シリアスは風邪を引いた！というわけでシリアス要素はありません。

普段真面目なアーサーだが、体育の時間だけはどうしてもサボりたくなる。勿論、それを実行した事は無いけれど。気分としては着替えの前には既に逃走したい。別に運動が苦手だとか、運動するの嫌だとか、そんな事ではない。汗をかくのは嫌だがまあそれは運動にはつきものだし仕方が無いだろう。運動した後はさっぱりする。その為の汗ならば甘んじて受け入れようではないか。

だが、どうしても。どうしても、学校で行われる体育の更衣の間が嫌だった。

季節は夏。7月の上旬というこの日、紫外線は強くかなり暑い。普通の生徒はベストも脱ぎ捨てて指定のシャツとズボンと日々を過ごしている筈だ。だというのにアーサーはベストは着ているしネクタイもきっちりしている。

ネクタイは校則だから当然で、半分程（正確にはそれより少ないかもしれない）の生徒がきちんとやっている事だとしても、ベストは校則ではない。冬はベストを着るようという指定があるが、夏は別にそんな指定は無い。昔はあったそうだが、それが原因で熱中症を起こす生徒やだれる生徒が増えて改正したらしい。なのにアーサーは未だベストを着込んでいる。

シャツ一枚という姿がどうも不真面目というか、だれているように見えるというのもある（私服ならまだしも、此処は学校だ）。が、しかしそれ以上の理由があった。それから、その理由から普通の生徒より若干暑さに強い、というのも。

「アーサー、次体育だぜ」

「はよ行こや」

「皆もう行っちゃったよ〜?」

普段はあまり誰ともつるまないアーサーは、最近妙な三人に絡まれつつあった。というか、完全に絡まれている気がする。その原因が何かなんて解りきっている。三人のうちの一人が、アーサーと幼馴染という関係にある事がその原因の一つだろう。というか、多分それが理由の大半を占めている。

その三人が教室でもたもたしているアーサーに話しかけてきた。もたもたしている理由など、単純に体育の時間が嫌なだけなのだがというより、更衣の時間が嫌だ。男である限り着替え自体にそんなに時間は掛からないから、生徒が皆着替え終わった頃に行こうと思っていた。

休憩時間は10分もある。3分あれば着替えられるし、グラウンド移動も走れば1分とかからない。なのに、最近アーサーに絡んでくるその三人は一人教室に残ったままであるアーサーにそう声をかけた。しかも幼馴染はによとからかうような笑みを浮かべてアーサーを見てくる。アーサーが更衣の時間を嫌がる理由を知っているくせに、この男は。

舌打ちをし、体操着を持ってその三人へ近付く。同時に幼馴染の脛を力いっぱい蹴っておいた。

「っっっ!!」

涙目になって脛を押さえながらアーサーを睨んでくるが、完全に無視する。理由を知っておきながらあんな笑みを浮かべる奴が悪い。残りの二人が不思議そうに幼馴染を見遣る。

「何しとるんフランシス」

「一人で劇の練習か？」

「ちが、マジで痛いんだって！」

騒ぐ三人を放って一人で教室を出る。どうも幼馴染 フランシ

ス以外の人物とつるんでいるというこの状況に慣れない。別に嬉しくないわけではない（寧ろどちらかという嬉しい）が、どうしてもあの三人のノリにはついていけないのだ。何せつい最近まで休憩時間は一人で読書をするか、本来日直がすべき仕事をしてきたのだから（勿論日直が居る場合その日直にやらせるが）。

そんなところへ急にフランシスがあの人を連れてきて、無駄に明るくアーサーに話しかけてきた。既に出来てしまったグループの中へ入っていくのはどうも難しいし、何だか気が引ける。フランシスはまあともかく、あの二人はアーサーに気を遣っているのではないかと思ってしまう。

ふう、と小さく溜息を吐いたところで、突然後ろから衝撃。その例の二人が両側からアーサーと（強制的に）肩を組んできたのだ。

「俺ら置いてくとか相変わらず酷いなあ」

茶化すように言う男の傍らで、アーサーは何も返せず更衣室までこのままだった。

* * *

俺ら先に行ってるぜ、という男のやけに元気で無駄に楽しそうな声に気の無い返事を返して、やっと一人になったと安堵の息を吐いて、着替え始める。

「アーサーが着替えるところ、初めて見るわあ」

不意に聞こえてきた声に慌てて振り返る。そこに居たのは丁度着替えているところらしく、上半身裸な肌が黒めの男だった。

「アント……っ!？」

てつきり奴らと一緒に出て行っただと思っていたのに。

驚きのあまりシャツのボタンを外している状態で固まってしまった。ぱくぱくと口を動かして指差す。普通同じ男が更衣室に居たところでそんなに驚く事は無いが、アーサーは本当に別の男が居るところで着替えるのが嫌だ。何故なら。

ふとアントーニヨの顔から上半身へ視線を移した時に、まるで大きな岩でも頭の上に落ちてきたようなショックを受けた。

見なければ良かった、と視線を逸らす。

「俺なあ、フランスス曰くマイペースやからいつつもあいつらに置いてけぼり食らうねん。体育の時以外やったら待ってもらえるんやけど、ギルちゃんが体育大好きやからなあ」

あ、フランススは時々待ってくれるんやで？

何となくアーサーが言いたい事が解ったのか(まあ、半分当たりで半分外れだが)、のほほんとした笑みを浮かべて言うアントーニヨに脱力した。だったらアーサーなんか待ってないで早く更衣室で着替えれば良かったのに。いや、寧ろそうして欲しかった。

何故こんな　こんなガタイのいい男と同じ空間で着替えなければいけないのか。

アーサーは昔から兄や近所の子供たちからすれば少し細めだった。それは子供の時だから大して目立たなかったが、中学に上がった辺りから気になるようになっていた。細いどころか最早貧弱のレベルで、筋肉をつけようと運動部に入ったが全くつかないどころか貴重な体重が減っていく一方だった。

勿論それは、高校生になった今も変わらない。現在中学生の従弟よりも細く背も低い。最早アーサーにとってコンプレックスだった別に並んで着替える事自体が嫌なのではない。否、確かにそれも少し抵抗はあるが（何せ嫌でも自分の貧弱さを再認せざるを得ない）、それよりも嫌なのはこの貧弱な体を見られる事だ。昔から喧嘩だけは強いため売られても返り討ちには出来るが、だからと言って馬鹿にされないわけがない。どれだけ朗らかなアントーニヨでも、馬鹿にしないという保障は無い。

羨ましさ妬まじさと恨めしさを緋い交ぜにした視線で彼をじつと見つめる。それに気付いていないのか鼻歌を交えながら着替えているアントーニヨは、アーサーの考えている事など知りもしないのだろう。

盛大な溜息を吐いて着替えを再開する。あんな男、気にする事も無い。そう自分自身に言い聞かせて体操着に着替えていたら、どうやらアントーニヨが着替え終わったらしくアーサーに近付いてきた。

「……………？何だよ」

「ん？いや、アーサー待つとるだけやで？」

待つだけなら更衣室の外でももつと離れていてもいいだろうに、どうして態々こんなに近くまでくる必要があるのか。もうこの男の意味不明な部分には突っ込まない事にして、着替えを再開する。どう思われようが関係ない。最早ほぼ自棄になっていた。

何かを企んでいそうな、しかし何も考えていなさそうな、とても判断に困るような笑みを浮かべてアーサーが着替え終わるのを待っている。

「……………意外と筋肉あるんだな」

ぷい、とそっぽを向いて着替えながら皮肉っぽく言う。

アントーニヨにはまあ、筋肉はあるにはあるんだろうなと思つていた程度だったアーサーにとって、直に見た「あるにはある」どころではないそれはかなり意外で、そしてショックを受ける要因になった。

フランスはそんなにあるほうではないが、その「あるにはある」タイプで、少なくともアーサーよりは筋肉がある。あの三人組の中で最も筋肉があるのはギルベルト、次点でアントーニヨ、フランスくらいで、アントーニヨとフランスは同等かフランスより若干アントーニヨがある程度かと思つていたのに。

その台詞が自爆しているような発言だと、次のアントーニヨの台詞で気付いた。

「そう言うお前は無いなあ」

その台詞と一緒に突き刺さった視線は、顔ではなくアーサーの上半身にあった。基本的に体操着を着るより脱いだものをたたむ事を優先させるアーサーは、丁度そのたたむところだった為にその薄い胸板と全然割れていない腹筋、男にしては随分細い腰を晒していた。途端に顔を赤くする。だがそれは、

「何だとゴラア！」

羞恥心からではなく、怒りからだ。

ずっと気にしていた事を易とも簡単に。そうなるような発言をしたのはアーサー自身とはいえ、こんなにあっさりと口にしなくてもいいではないか。

少しだけ泣きたくなつたのを我慢して、睨み付ける。

長い間コンプレックスだったのだ。身長の割りに軽い体重と、女みたいにひよろつとしたこの外見には。その上この童顔のせいでこの年になつても実年齢より下に見られるし、舐められて喧嘩を売ら

れた事なんて数え切れない程だ。

それを、こつもあつさり、簡単に。

「俺、お前のその貧弱なところ結構好きやで？」

フランススのように蹴りでも入れてやろうかと思つたところで聞こえてきたその台詞に思わず固まる。

この男は今、何と言つた？

聞き返す事も忘れて言われた言葉を反芻する。

好き。好きと言つた。この男は今、アーサーのコンプレックスである事を好きと、そう言つた。顔に熱が集まるのが解る。先程とは違う意味で真っ赤になつて、思わず俯いた。

嬉しくなんか無い。こんな男に好きだなんて言われたくらいで、嬉しいだなんて。そんな事、思うわけが無い。

ぶつぶつと相手には何と言つているか聞き取れないくらいの声で呟き続ける。

「ひよあつー！」

突然脇腹に感じた生温く柔らかい感触に思わず変な声を上げる。

アントーニヨの骨ばつた男らしい手がアーサーの脇腹に触れていた。否、触れていたというよりがっしりと掴まれていると言つた方が的確か。俯いていたせいで、彼の手がアーサーに伸びていた事に気付かなかつた。

単純に、ただ細さを確認するためだけに脇腹を触りまくっているかのような彼。しかしアーサーは、そんな意図しないものでも反応する。

「ちよ……くすぐりたい……」

アーサーは大体、どこでも弱い。脇腹は少し指でつつかれる程度でも過剰に反応するし、膝を意図的に触られればそこでもまた過剰反応して思わず手を振り払う。滅多に触られる事など無いが（触るとすればあの幼馴染であるフランシスカ従弟くらいだ）、足の裏など以外の他だ。

脇腹もかなり弱いのに、アントーニヨはそれを知らないし、そもそもくすぐろうとは思っていないのだろうがいつまでも触りまくっている。

力が抜けて思わず崩れ落ちたアーサーを見て不思議そうにしているアントーニヨは、最早天然のフリをして実は態となのではないかと思えてくる。

笑い声を抑えるだけで精一杯なのに。こんな更衣室で笑い声を上げれば、それこそ外に居る生徒や教師に不審がられるに決まっている。

「も、いい加減やめろって・・・！」

笑いを抑えようとすると必然的に息を殺す事になるが、それをすると勿論暫く続いた後には息切れし始める。もうその手は意図的にくすぐっているようにしか思えないくらいに、執拗に脇腹を指先でなぞったりつまんだりしている。というか、実際今となっては態となのだろうか。

ふと彼の表情に目を遣ると、面白がって笑みを浮かべていた。そしてこんな時でも目を閉じない限り体制的に絶対に彼のガタイのいい体が目に入る。嗚呼、二重でむかつく。

人のコンプレックスをさらりと口にした後それを好きだとか何とか言って翻弄してきたり（実際には多分それは天然なのだろうけれど）、人の弱点をつく事を面白がったり（これはアーサー自身もよくする事はあるが）、無駄にガタイが良かったり（こればかりはどうしようもない事ではある）。

何だか関係の無い事でまで彼に腹を立てたアーサーは、未だに面白がってくすぐり続けている彼の股間を蹴り上げ

「アーサー、トーニョ、もう授業はじまっ……………」

ようとしたりとここで、丁度ドアが開いてフランシスが入ってきた。そして言いかけた言葉も起こしていた行動も途中で止まる。アントーニョと二人揃ってそっちを見て、訝しげに首を傾げた。

「フランシス邪魔だぜー。どうし……………」

続いてギルベルトもドアからひよっこり顔を覗かせる。そして同じように固まり、一瞬にして顔を青くさせた。よく見ればフランシスも若干青くなっている。二人して青くなって固まっている理由が全く思いつかない。

「……………何してんだよ」

息を切らしたまま問い掛ける。見ればアントーニョもぼけーっと口を開いたまま、顔を青ざめさせている二人を見つめていた。早くどければいいのに。

未だに脇腹の辺りにある手をどけようとして、またもフランシスによつてそれは叶わなかった。

「いや……………お前らこそ、何してんの？」

その台詞で、自分たちの今の状況をやっとな理解するに及んだから。そして今の自分たちの状況が、アーサーの行動を止めるに相応しいくらいに有り得ない状況だったから。

何せアーサーはロッカーに背中を預けてへたり込んで（しかも口

ツカーにあるのは背中の上の方だけで、ほぼ寝転んでいるのか座り込んでいるのか判断しがたい体勢だ)、その上にはほぼ乗りかかっている格好でアントーニヨが居るし、その腕はアーサーの体に伸びている。しかも、アーサーは上半身裸で笑いを堪えたおかげで息も上がっている。なるほどこれはつまり。

「うわあああ！」

近すぎる距離と今の状況、周りからどう見えるかなどを全て把握してから、アーサーはアントーニヨを突き飛ばした。

顔は今完全に茹で上がっているだろう。うわ、と声を上げて尻餅をついたアントーニヨを気にも留めず、その勢いそのまま急いで体操着を着てから更衣室を飛び出した。

あれじゃ絶対に誤解された。飛び出した後にそう思ったが、もう遅い。顔を真っ赤にさせて、グラウンドへ突っ走る。そこには既にサッカーを始めている生徒達が居て、訝しげにこちらを見ていたがアーサーはそれに気を遣う余裕すら無い。

それからアーサーは、ギルベルトやフランシスがさっきとは打って変わったたによ顔で話しかけてくるまでずっとぐるぐると思考が纏まらず、抱えた膝に顔を埋めていた。どうやらアントーニヨは全く何がどうなっているのかも理解していなかったらしいと聞いて尚更恥ずかしくなって顔を再び真っ赤にさせるアーサーだった。

(後書き)

タイトルと内容ほぼ関係ありませんが。
アーサーは筋肉ないのがコンプレックスだったらな、っていう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908v/>

君の好きなとこ

2011年10月9日13時15分発行